

から係り官が慌てふたむきやつて来て、どうか隠便に頼む、此際アメさんのご機嫌を害うと、跳ね返りが怖いと頻に頭を下げるので、此も敗戦の憂き目かなあと、諦めてホコを収めたことであつた。余談はさて置き翁は言葉を通じて、時に是非君に見せたいものがあると、一幅の掛地を奥から取り出した。一瞥すると墨痕淋漓、庚戌（四二）三月於旅順獄中大韓国人安重根書とある。

康工難用連抱奇材、
子思聖人用人猶匠之用木取其所長棄其所短故杞梓連抱而有數尺之朽良工不棄

浅学の私には手剛く、一応メモに留め後日金玉均や朴泳孝などの書を蒐集の、旧師に尋ねてみると、文意は、二人で手を合せて抱える程の巨木でも下手な大工さんは短所があるを使い切れない、自分の如き、人間はとても使いこなせまい、と胸を張ってリキんだ所だろうと。安が果して自負する程の大物かどうかは姑く



庚戌三月 於旅順獄中 大韓人 安重根 書

安重根最後の筆蹟

措き、墨跡文章などから推理し唯の安ちゃん乃至眼に一丁字の無い不逞の輩と、一蹴するには当らないと認識を新にしたことであつた。而して縁は全く異なるもの終戦後、安の孫が、或る日翁を訪い祖父の絶筆を見せてくれと云う、軸を上げると如何にも懐しげに吸いつくみたい、眼を細め最後に黙禱して立去つた。そこで私からどうして此絶筆が翁の手にあるかを伺つてみると、安が兇行（四二、一〇、二六）後逮されて旅順で愈々裁判に附せらるることになり、自分が関東庁から其弁護人を委嘱され、彼の為に面倒を見てやつた時の記念品だ、その当時安はカトリック信者で三十二歳の壯齡であつたと。私が翁に辞去の挨拶をする、暫く待つてくれと色紙を持出し、此は金子さんの染筆、自分が喜寿の賀を迎え健康が勝れず、種々の病に罹り全く病気のデパートみたいだと、ボヤいて居たのが翁の耳に入り。残生は二十三ある喜の祝百貨店と

は百ヶ年なり、西川君喜寿に寄す
片水
と染筆懇に慰撫された時の記念、此のバトンを君に引継ぐと云う。洵に願つてもない拝領物に、涙がこぼれ此は長寿にあやかるお守札を賜つたみたいと肝に銘じ頂いて家宝として居る。最後のむすびに公にゆかりのゴシップ、一題を付け加えペンを擱く。

た。侯は外貌白哲瘦軀大立ものと思えぬ貧弱であつたが、炯々たるまなざしは氷の如く冷静を表わしていた。是に反し齋藤総督は童顔肥満悠揚迫らぬ温容で、実に可い対照であつた。李完用侯が景福宮で曾弥子森槐南と共に、伊藤公の惜別の宴（四二、七）の席上四氏聯作の七言絶句を、侯が揮毫した書幅を手に入れていたが終戦後の引揚ゴタゴタに総督の書と共に惜しくも喪失してしまつた。

議事者身在事之外順審利害之情
任事者身在事之中宜忘利害之慮
朝鮮總督府の史料記念館に於て、眼に留つた公の坐右銘御存じの菜根譚の一節である。
墨跡箴言とともに流石に公の人為りをイメージュするにふさわしい貴重な文献である。
或日金子さんの事伝を齋藤総督に取次の機会に、此に触れ垂涎措く能わぬ旨を話し揮毫を懇願して辞去した。よもやと思つていた頃、官邸から使者があり齋藤実書卓水落款の上に、懇に為め書までして届けられた。此時程バックの難有味を満喫したことはない。
字は一点一畫もゆるがせにしない規格の正しい書風であつた。書の序に日韓併合に偉勲の有つた、李完用侯は、実に雄健端雅の能筆家であつ

（三九、四）
（太陽鉦工KK大阪支店）

私の遍歴記

高石淳

此度大阪日立冷械株式会社の神戸出張所の開設と共に当地勤務となり市庁前松井ビルに事務所を開くことになりました。久方振りに懐しい神戸の山々を眺め、又神戸の発展に驚いて眺め歩いて居るうち、三神に太陽鉦工の分室のあるのを見つけ辰巳会の本部であり茲には彦島当時の旧友、笹記為三郎氏が居られる筈と訪ねて見たところ、同氏は既に一ヶ月程前に八十歳の高齡で物故されたと聞き驚いたが、辰巳会の会員であることを申して同室に居られた幹事の柳田義一氏に面会し、私の鈴木商店時代の経歴を述べ、当時の思出と共に御厄介になった方々の消息等も伺い得て楽しい一時を過しましたので、この機会に会誌「たつみ」の誌上を拝借して私の思出の一、二を申述べさせて頂きます。

主宰する臨時発電水力調査部（日沙商会の二階）であつた。その後中津川水電、鈴木商店工部部、太田川水電と転じ、更に大正十三年彦島のロード式窒素工業株式に転じ電気技術者としてアンモニア合成工場の建設及びその運転に従事した。昭和三年に至り吾々が予想だにしなかつた鈴木商店の瓦解となつた。

その間下関の山陽電軌にも関係して発電所の建設、電車工事等の手伝をした。この間に多くの方々の御厄介になり思出の深い方々が沢山ありますが挙げれば限りがありません。直接の長として御指導を賜つた方々は依岡様、竹岡（筍）様、山岡様、田子（富）様、吉本博士、織田様、二階堂様、武岡（忠）様、加賀林様

鈴木商店の製油所であつた合同油脂グリセリンの兵庫工場の電気施設が火災のため灰燼に帰し、私はその電気主任技術者として名儀を貸してあつた関係で呼び戻されてその復旧工事に従事した。そこで再び鈴木商店関連の事業に従事することになった。其後会社は昭和十二年日本油脂の併になったが、私はこの兵庫工場に十四年、戦争中は上海工場、終戦後は王子工場、本社、大阪支社と転じて昭和三十四年私の半世を捧げた日本油脂を退くことになり、爾後日立関係に二度の勤めを得て現在に至つて居ります。

二、思 出

水力電気調査部では調査、測量、設計、申請、等が主なる仕事で遂に工事には至らなかつた。

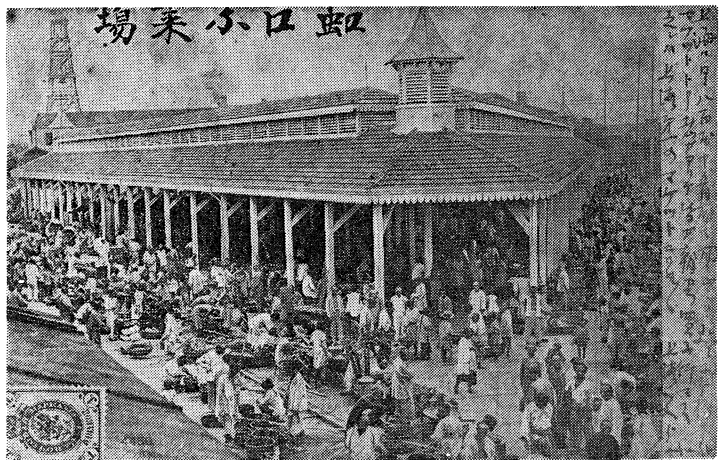
私が電気技術者として思出深いのは彦島時代と兵庫工場である。彦島ではフランスからアンモニア合成工場のワンユニットが輸入されてフランスから技術者が三名来られて建設の指導を受けた。お蔭で私は新しい多くの電気機械器具を手にした。又ゲージ、メーター類も私の管理下であつたので一〇〇〇気圧の圧力計、窒素と水素の混合比率をガスの比熱の差によって正格に表示するメータ

（現在のCO₂メーターの原理）などはまだ日本では初めてであつた。又一〇〇〇気圧のコンプレッサー、合成塔、及びそのカタライザー、一〇〇〇気圧用鋼管の溶接技術等、当時の吾々には新技術であつた。又国内製品であるが三三、〇〇〇V、四、四五〇KVAの特高屋外変電所の建設は当時としては進んだ方であつた。又山陽電軌では直流変電所の建設、電車工事等よい経験であつた。其後兵庫工場に転動してからは先づ電解用直流変電設備の復旧工事、電解槽のガス漏洩を完全にとめた改善修理、「ユングストロームタービン」による自家発電所の建設等は快心の経験であつた。以上は私は電気技術者としての思出の仕事であるが次は私が電気屋から油屋に転換した思出である。昭和七年長郷工場長が魚油（鰯油）を原料とする食用油脂製造の研究のためドイツに行かれ、ブロックス氏と言うリバーブラザーの工場に居つた技術者を連れて来られ、兵庫工場にそのための研究所を設け極秘の内に彼に研究せしめることになった。そしてそのログ氏の下につけられたのが油脂には全く白紙であつた私と、運転にベテランの神田君であつた。私はロブ氏の言う

一、経 歴

私は大正六年蔵前の電気科を出てその七月鈴木商店に入社、最初に勤務したのは神戸製鋼所の依岡専務の

通りを記録し、神田君は彼の言う通り試験装置を運転した。他人は絶対に入らず、毎日作業を続け約六ヶ月に及んだ。お蔭で私も油脂を勉強し、カタライザーの還元、硬化、精製、脱臭、と彼の技術を習得した。研究は成功したのでサンプルをつくることになり、先ず印度人向のギーバターのモデファイを造り、長郷工場長がロブ氏の帰路に同道して印度に行かれ、業界に示されたところ好



上海第1の虹口マーケット (明治38年6月10日付絵はがき)

評を得たので、急ぎ本工場を建設することになり、先づ王子工場に月産二〇〇屯(?)の食用油脂工場を、つづいて兵庫工場に月産六〇〇屯の工場を建設し、フル生産にて輸出し王子工場は三菱商事を通じてカルカタ方面へ、兵庫工場は三井物産を通じてボンベイに輸出した。その頃は私も全く油脂技術者になって最も愉快な時代であった。しかし好事魔多しであまりに多量の数量を急に輸出したので印度側で恐れを感じ、或はリバーブラザースの指金と思うが倍の関税をかけられて輸出は遂にストップした。この繁栄も一年有余であったと思う。最近日本油脂で東南アジア方面にギーバターの輸出を初めたそうであるが、三十年の昔に還へり誠に結構なことである。其後は食用油脂を欧州へマーガリン原料として輸出し、初めは樽入であったが遂にバルク(タンク船)で多量に出した。この魚油を原料とする食用油脂への解決は日本油脂工業に一エポックを画したものであるが、これは一に長郷

工場長の先見の銘と熱意の賜物である。そしてその発祥は実に兵庫工場のロブ氏の研究所からである。抑々この兵庫工場は嘗って鈴木商店が日本特産の魚油に目をつけて茲に製油所を設け、神戸製鋼所の試験所で村橋さんの指導の下に久保田さんが魚油から初めて硬化油をつくられ、その工場をこの製油所跡に建設された。これが日本人の造った硬化油工場の嚆矢であり、歴史的存在であった。其後合同油脂、日本油脂となり前述の通り種々改築はされたが現在は、ミシンの食用油脂工場となり全く改造されたので昔を偲ぶ何物もない。私は長郷工場長の後を受けて兵庫工場長になり食用油脂の生産に専念しました。ところが間もなく戦争となり、茲にまた私の思出がありません。

それは大東亜戦争で日本海軍が上海に上陸してそこにあるリバーブラザースの経営する石鹼工場、中国肥皂公司を占領され日本油脂がその工場の経営を受託することになり、私はその経営の責任者を命ぜられた。即ち私が工場長で総監督に鴻田君、事務監督に奥田君の三人で昭和六年赴任した。その時は英国人が六名、支那人の職員が約五十名、職工(ク

ーリー)が約三〇〇人居ったが挨拶になんと言ってよいかわからなかったので「天皇陛下の命により」とやったが、英国人は不尊な態度で笑って居た。英国人は其後一ヶ月程で皆キャンプに入れられたので支那人相手に三人で経営した。原料は主としてピロ油と支那牛脂であるが原料は軍が解してグリセリンは内地の火薬工場に、脂肪酸は石鹼にして軍に納めた。有名な「ラックス」石鹼である。また工場敷地の一隅にマーガリン工場があった。オランダ人だという人が運転して居た。そこで始めてクーリングドラムを見た。戦後王子工場に採用したがこれは今のポテターの前身である。私はそこで三年勤めて一度内地に帰りたいたと終戦の年の五月に大陸を廻り朝鮮を経て帰国したが、帰りは船も飛行機もなく、遂に現地には帰れず其儘終戦となり、千葉に疎開して本社に通ううち先輩の諸公がページになられたので吾々が会社経営の責任に当ることになり私が常務となって大阪支社に來て関西探台として主として販売面を見たが二十六年統制がはづれ、自由となってからは経営も困難となり、石鹼の販売も易くなかった。三

手がいらぬ。どこでも練習が出来る。そして大声を発して健康に最もよく、或は志士賢人の名作を吟じては心の糧とし、或は憂国の詩を吟じては青年の血を滾らし、実に心身両面の鍛練となり、一石二鳥である。当時の師範は真子西洲と言う関大の一学生であった。佐賀の出身で熊本派の吟法で体軀も大きく堂々として声量があり、音吐朗々堂々吾々青年の心を捕へた。関西吟詩同好会は大阪を中心として京阪神に一万の会員を容し盛況を極めた。吾々は湊川神社の七生館を道場として毎週一夕真子師範を迎へて練習をした。木戸孝允の「夜座思亡友」とか西郷南洲の「獄中作」等を吟じては青年の血を沸かしたものである。練習は続けて師範代になったが戦争になって上海に行き同好会でも同志と共に上海吟詩同好会を作り支那人の篤志家も交へて盛んに吟じた。ところがこの漢詩の本場に来て一つの発見をした。それは一夕菜館で支那の美女なるものの歌を聞いた。男の引く胡弓に合せて壁に向って歌うのであるが吾々には耳なれない奇声で聞くに堪えられないものであった。念のためその歌詞をたづねた所「月落ち烏啼いで…」の張継の有名な「相橋夜泊」

十年停年(六十歳)で役員を退き尼崎油業の社長として四ヶ年、三十四年にこれも辞して愈々日本油脂を去ることになった。爾後は日立の旧友の知遇を受けて現在日立関係で働いて居ります。幸い身体は極めて頑健部分的にも何の故障もなく七十二歳を迎へました。感謝して居ります。次に私の精神面を少し申述べて見たいと思います。

三、水之徳

一、よく方円の器に従ふものは水也
一、交れば他を融和し渾然一体をなすは水也
一、自ら清くして他を淨ふするは水也

一、潤を恵み渴を癒やし生を与ふるは水也
一、常に自己の進路を求めて止まざるは水也
一、自ら活動して他を動かしむるは水也
一、障害に遭ひ激して其勢力を百倍するは水也

一、洋々乎として大洋を充たし発しては蒸気となり雲となり雨を作り雪と交じ露と化し凝っては玲瓏たる鏡となり而も其性を失はざるは水也
私が昭和三年彦島から合同油脂グ

リセンの兵庫工場に呼び戻され、初めて工場を訪れて事務所には入った時最初に目についたのは小林庶務課長の後の壁の上に掲げてあった「水五則」の額である。実に名文で小林素堂書とあったが書体も立流で感心した。それが右掲の第三項、第五項第六項、第七項、第八項の五項で題が「水五則」とあり、素堂氏は庶務課長であった。爾来私はこれをよい教訓として諳ずる位に覚えて居た。時過ぎて私が大阪支社長の時、日本油脂で熱海に保養所を設けることになり、大阪からも何か寄贈して呉れと江渡部長から申出があったので何か心の保養になるものをと考へた時兵庫工場の「水五則」を思い出したがあの額は既に戦災でない。何かにその正文があるだろうと雑誌や本をあさって見たが無い。ところがふとしたことから家内が神戸の元町の水道工事屋のショウウィンドウに「水五則」が掲げてあるのを見付けて来た。早速写して来たが確かにあの水五則である。尚それには東山散史とあった。この東山散史とは如何なる人かその時間聞いて置くことを忘れたので未だに判りませんが御存じの方があればお知らせ願います。この名文を何度も読返して見た。その時

ふと感じたことはこれは動く水である。しかし静なる水もある。それにもよい性質がある。甚だ僭越であるが私は熟慮してそれに三項を加へた。それが右掲の第一項、第二項、第三項、第四項である。八項になったので八項ではおかしいから水の性として原文を持つて京都嵯峨の天竜寺の管長関牧翁老師を訪ね、その揮毫を依頼した。原稿ですからお気付きのところは御訂正を願いますと頼んだが文は立派なものだと言って一字一句も直されなかつたが題が水の性では小さい「水之徳」と致しませうと言われた。流石に老師だなどと感心した。二枚書いて貰い一面は熱海の保養所に、身体の保養に出湯につかり心の保養は「水の徳」と添書をつけて掲げて貰って今も尚其儘あります。一面は支社長室に掲げ爾来私の座右の銘と致して居ります。

四、詩吟

私はこれと言う運動はやらない。勝負事は一切やらない。殆んど無趣味に近い。しかし唯詩吟を趣味とし、道楽として居る。これは兵庫工場の時土居英成氏と共に初めた。昭和七、八年の満州事変の頃詩吟は当時の青年を風靡した。詩吟は師につくことが簡単で金がかからない。相

であった。私は驚きと共に啞然とした。尚試みに吐甫や李白の詩も聞いて見たが感銘も起きなかった。唯奇声が耳に残るのみであった。それは詩を棒読に支那式の発音で甲高い節をつけたものである。詩の作法で平仄の並べ方をやかましく言われるのは茲にあるのだなと感じた。即ち歌う時、発声し易いためだと悟った。しかし作詩の時、この平仄で如何に悩まされることか、私も天竜寺の心田和尚に手ほどきをして貰ったことがあるがこれで匙をなげたのである。漢詩には兎角難しい字を使つてあるが作法にしばらく止むを得ず辞書にもない様な難しい字を使うのである。しかしそれが棒読に支那式発音だに便なるが為であるのなら日本人は返り点付で訓で読むのだから何の意味もない。そこで私は何の平仄ぞやと言いたい。爾来私は感ずる所があつて日本人の作る漢詩は平仄にとられず自由に而も誰にでも読める当用漢字を以て作るべしと言ふ主義を立て大胆にこれを試みることにして居る。しかし詩である以上韻をふむ位のことには止むを得ない。何かの会場等で感じたことを其儘詩に表わし即吟することを趣味とする様になつた。しかし従来の漢詩の愛好者

はこれを不法法で詩ではない。その苦心するところが詩の興味があるのだと言ふであらう。私は古典は古典として愛すべし、支那にも京劇と話劇がある如く、又日本にも歌舞伎と新派がある如く、日本人の作る日本流に読み且つ吟ずる詩には自由な詩もあつてもいいではないかと思ふのである。此頃私の詩吟も少し脱線気味になつて来ましたが詩吟が私の心身の健康に預つて力のあつたことは事実であり、今尚続けて居ります。

五、健康について

私は現在七十二歳になりますが極めて健康であります。事実十数年この方殆んど臥床の記憶がない。風邪を引かない。按摩にも全然かからない。部分的にもどこにも故障がない。血圧は一五〇に九〇些の異状もない。しかし私なりに健康法をやつて居ります。先ず風邪を引かない為めに冷水摩擦をやつて居ります。毎朝冷水三ばい浴びて摩擦をする。夕方の浴後と同様である。風邪は万病の基、風邪を引かないことが大切である。これは皮膚を丈夫にし風邪の防止方法である。次に胃腸は人間の工場であるから最も大切である。これが完全に活動して居れば必ず健康である。それには常に胃腸をして充

分に働く様心掛け、指導して居ることが肝要である。私の指導方法は先づ常に胃腸を冷さぬこと、即ち晒木綿の腹巻きを常に巻いて居る。次に食後一時間仰向けに横臥することである。その場合出来る丈胃の下部に圧力のかからぬ様臀部の方を少し高くする。非常に楽である。横臥中は全くの安静で他の部分を動かさない。専心胃腸をして活動せしめる。大体一時間すれば大半は消化する。これが大切である。薬は用いない。消化剤を用いると胃が横着して活動しなくなる。即ち不健康になる。他の内臓諸器管も同様で、器管をして十分に活動せしむることが健康である。私は薬を飲まない主義である。しかし病気の時は薬を飲まなければならぬがそれは力を補うためであつて器管を強める為ではない。力を快復するのは自分の力である。故に常に諸器管をして十分に活動する様心掛けることが肝要で、薬を乱用すれば却つて不健康になる。私は兄が薬を乱用して早逝した反面上海で支那人のクローリーは仁丹で何病でも癒ると聞きこの両極端を見て薬は飲まない主義になつた。しかし息に医者が居るのでパロチンの注射はして貰つて居る。これは各細胞の老

化を防ぐためパロチンは人間の唾液の内に自然にあるのだが年と共にその分泌が減じてくるのでそれを補い老化を防ぎ年をとらないためである。更に養生の一端として私は煙草は(一)のみで(十)がないから全然やらない。酒はカロリーがあるからやってもよいが唯その量と飲み方にある。酒は飲む時は大いに飲んでよいが明日は体内にアルコールが切れて居らねばならないのである。アルコールの分解は肝臓の仕事で毎日これに荷重をかけて居ることはよくない。それで私は晩酌はやらないことにして居る。以上が私の健康養生法である。

以上私の思出であるが少し敷衍して却つて駄足となつたことをお詫びして終りと致します。(以上)

昭和四十年三月
(大阪日立冷械KK勤務)

たつみ 第参号
昭和40年5月1日発行
編集人 柳田義一
発行所 辰巳会本部
神戸市生田区京町72
太陽鋳工株式会社内
電話 23281
分室 2254

印刷所 岡部証券印刷株式会社



久保田丑太郎氏 (明治11年11月16日生)

東川義房氏 (帝人商事) より寄せられた
た礼状

久保田丑太郎氏 謹啓
貴社より送付の「たつみ」第参号
を拝見し、誠にありがとうございました。
拙稿は、誠にありがとうございました。
今後とも、貴社と親交を深めたいと思
ひます。此致、敬具。

歴史の歳

<p>弘化2年(乙巳) 仏船貿易を求めて琉球に来航 英船和親を求めて長崎に来航 浦賀に砲台を築く 学習院を京都に置く</p> <p>安政4年(丁巳) 下田条約調印 幕府築地講武所内に軍艦教授所を設 置、幕府は大阪、兵庫、江戸、新潟 の開港を公約</p> <p>明治2年(己巳) 日独通商条約調印 薩長土肥4藩奉還を奏請 新聞刊行の許可 藩籍奉還聴許 北海道設置 東京横浜電信成る 大聖寺藩大津造船工場に汽船一番丸 進水(わが国に於ける川蒸気船建造 の最初)加賀藩、兵庫湊川口西岸の 借地に兵庫製鉄所を設立して大津造 船所と提携</p> <p>4月 兵庫県知事 2代 久我維磨 5月 " 3代 中島錫胤 6月 " 4代 陸奥宗光 8月 " 5代 税所 篤</p> <p>民部官を民部省と改称 兵部省、大蔵省設置 スエズ運河開通 米価1升9銭</p>	<p>明治14年(辛巳) 国会開設の刺諭下る 自由党結成 総理板垣退助 川崎正藏兵庫東出町に川崎兵庫造船 所を開設 資本金10万円 日本鉄道会社設立 警視庁設置 パナマ運河の起工 農商務省設置 松方大蔵卿不換紙幣の整理着手 米価1升11銭2厘</p> <p>明治26年(癸巳) 東北線開通 ケーブル帝大に哲学を講ず 郡司(成忠)大尉千島探検開拓に 出発(3・20) 大阪、神戸両市に電話交換局開設 (3・25) 福島安正中佐欧州よりの帰途単騎シ ベリア横断(5・21) 「君が代」を国歌に制定 日本郵船会社、日本郵船(株)と社 名変更(12・1) 有限責任石川島造船所(株)東京石 川島造船所と社名変更(9・5) 三菱合資会社設立 三菱造船所(長 崎)は同社三菱造船所と呼称(12・ 15) 横浜船渠(株)設立(12)</p>	<p>鉄道院神戸工場にて初めて国産蒸気 機関車を製作 米価1升7銭4厘</p> <p>明治38年(乙巳) 日露戦争 旅順陥落 奉天占領(3・10) 日本海々戦(5・27) 米大統領ルーズベルト日露講和を試 む、ポーツマス条約を結びて和す。 (9・5) 阪神電鉄開通(4・12) メーデーにつき平民社にて協議 第2次日英同盟(拡張協約)締結 奥羽線開通(9・14) 3代神戸市長 水上浩躬 日韓(韓国保護条約)協約調印(8 ・12) 神戸川崎銀行開業 資本金 100万円 頭取 川崎芳太郎 米価1升12銭8厘</p> <p>大正6年(丁巳) ロシア革命勃発 ニコライ2世退位 ロマノフ王朝滅亡 2月革命 ケレンスキー内閣成立 10月革命 ロシア新政府を承認 ソビエト政府成立</p>
---	---	--